甘いすうぃ～つの食べ方☆

葉月ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘いすうぃ～つの食べ方☆

【Ｎコード】

Ｎ８９００Ｄ

【作者名】

葉月ちゃん

【あらすじ】

鈴木あさはごくごくフツー（本人談）の女子高校生。それが新入生１、カッコいい男子学生・皆堂英輔が巻き起こす大波に巻き込まれていくうちに……どうなっちゃうのぉ！？という物語にするつもりです☆ふざけ過ぎかもしれません、あしからず……。

1話　春！出会いの季節だけど…？（前書き）

どうも葉月です。

この『甘いすぅぃ～つの食べ方☆』ではあまあま、らぶらぶな一面とは逆に、多少シリアスがあるかもな～と思います。

更新は週2、3回を予定しており、土日にできたらなーと思います。

細々とですが、この新連載をよろしくお願いします。

1話　春！出会いの季節だけど…？

女子の目は鵜の目鷹の目…。

いつもイイ男子を狙っておりまする…。

そんなコトとは露知らず、ボケッとしているイイ男子は掻(カ)っ攫(サラ)われます…ョ。

そんなコトとは無縁の、あるジミ～なおジョシのお話。

始まり始まり……？

「あさ！あさってばドコ見てんのよ！！ほら皆堂英輔(かいどうえいすけ)様が来てるんだから一目ぐらい拝んどかないと損よ、ソン！」

窓の外を舞う桜に目を奪われていた…なんて詩的に始まるわけが無い！！

窓の外を見ながら妄想してえへへと妖笑みを浮かべていた少女、鈴木あさは友達の言葉にはっとして顔を上げた。

「え～、私そんな人知らないしー興味ないからーいいやー」

「何言ってんの！？皆堂英輔様って言ったら学年一のイケメンじゃない！！それを知らないとは…何て罰当たりなコトを……」

「だって～、ホントに興味ないんだもーん。私わアニメ一本よ～」

「バカ言ってないで早く来なさい！！」

ずりずり…と引きずっていかれた先は廊下。
周りにパアッとゴ～ジャスぅな華を撒き散らしながら（本当に散らしてるワケではありません！あしからず…）進む、ちょっと色黒男子。
彼こそ我らがS高校きっての美男子、皆堂英輔様です☆（なんちって…）

「はぁ～、やっぱシュテキー。でもアレ位だとカノジョ居てもおかしくないし…やっぱ諦めるしかないのかな～」

「みんな皆堂の事素敵とかカッコいいとか言ってるけどぉ、あたしにゃーその魅力がよくわかんないなぁ～」

バコッ

「何バカ言ってんのさ～、取り合えずアレぐらいがカッコいいの基準だと思っとけばいいのよ～」

「ふ～ん？ナルホド…」

軽く突っ込まれてナミダ目で彼を眺めた。
そうこうしている内にその皆堂英輔は、自分のクラスに入ってしまったようだった。
すると今まで人で犇いていた廊下が、嘘のように人気が無くなってしまった。

「…彼の経済効果ってものすごいんだ～」

「何感心してんのよ、もうすぐ授業じゃない！」

帰りもやっぱり友達に引きずられて教室に入る今日のあさでした…。

2話　びっくりな委員決め！

……ふぁ～～～眠い……

「年頃の乙女が大口開けて大欠伸してるなんて～、かっこ悪いぞ」

「別にいいじゃんか～、生理現象なんだからさぁー」

「そりゃそうだけど……やっぱ手ぇ当てるとかさぁ、何かやった方がいいと思うよ」

「はいはい～」

春うららの今日この頃。
今日もボケ～っとしている鈴木あさ…（毎日だけどねぇ）。
それもこれも昨日の夜（から今日の未明にかけて）、パソコンで無料アニメの取り込みをしていたからだ。

「おいお前ら、授業始めるぞー」

ちょっと白髪交じりの爺くさい教師が、教卓をバン！と叩いて言った。
今日の授業はどこのクラスも委員決めだったが、ほとんどの女子の最大の関心事は隣のクラスから漏れ聞こえてくる声だった。
もちろん聞きたい声の主は皆堂英輔（かいどうえいすけ）様らしい。
その皆堂がどの委員に入るか、又はどの教科委員にはいるかが自分達の役割を決める重要な指針であるという。
そいつの気分に合わせて自分のやりたくない委員にでも入ったらどうすんだよ、とか思いつつ、あさは自分の事に集中する事にした。

「…じゃあ次！風紀委員、誰かやりたい奴いるか～？」
…あー風紀委員かー。どうせ嫌われ委員だし～、誰もやりたい人なんかいないよな～。
と思ったので、
「はい、私やりたいと思いマース」
と、手を上げた。
「じゃあ女子は鈴木に決まり、いいな」
特に異論もなかったので（つーか絶対無いに決まってる）、その場は丸く収まった。
ところがそれが決まった数秒後、隣のクラスから微かに声が聞こえてきた。
「じゃあオレ…残った風紀委員にするわ」
それを聞いた後ろの方の（ミーハー）女子が、
「はい！異議ありぃ！！」
と大声で立ち上がりながら言った。
……恥ずかしくないのかな？
「遅かったなぁ、あと1分早かったらジャンケンにしたんだがな～」
と、教師（たんにん）が皮肉な笑顔で言った。

するとその女子はワッとばかりに泣き出した。
オイオイそんなにアイツのコト好きなのか～、とか、ホントに好きなら相手のこともちゃんと考えろよ～、とか思っちゃったりしているあさでした。

そんなこんなでちゃんとした委員や教科委員が決まった。
その次の休み時間。
あさは1番の友達（だけど親友以下）に話しかけた。

「授業で思ったんだけどさー、好きな人の好みに合わせていて自分が辛くなんないもんかな～とか思ったんだけどぉ、そこんとこどう思う？」

「さぁ～？ウチも皆堂好きじゃないからなぁ～、なんとも言えないけど…いいんじゃない？本人がそれでよければ」

「なるホド～、そういう考えもあったかぁ……」

「ま、そんなに想われている相手も可哀想な話だけどネ」

「そうだネぇ」

そう言って2人でほのぼのしている時に、あの皆堂と同じ委員になれなくて大泣きした女子が近付いてきた。

「鈴木さん？ちょっと頼み事があるんだけど…いい？頼んじゃっても」

「あーうん、いいよぉ。何？」

「風紀委員会で皆堂クンと会うでしょ？その時に気付かれないように彼の写メ撮ってきて欲しいんだ」

「…ＯＫ、分かった。できるだけ頑張ってみる」

「ホント！？ありがと～、ヨロシク！じゃあねー」

「うん、また～」

その女子が去ってから、

「あんなに安請け合いしちゃっていいの？」

「いいのいいの、減るもんじゃないし。第一ウチも気になるからね～、そんな女子に人気のふぇいすってヤツが」

「……ふ、ふ～ん？」

みょ～な展開になってきたところで、今回のお話はしゅーりょー。

3話　本当のイミでの出会い（前書き）

遅くなってすいませんっ
主な人物の性格です。

鈴木あさ……ごくごく普通のＪＫ。顔もまあまあ、眼鏡フェチなのでいつも眼鏡を掛けているが目は悪くない。身長１５７ｃｍ。
　感情の上下が激しいが、他人に対してはかなり冷たい。幼い頃父親にＤＶを受けていたのでどこか後ろ暗い所もある。人間ウオッチングが趣味。

皆堂英輔……絵に描いたようなフェイスと明るく気さくな性格の持ち主なので誰からも好かれる。オマケにスポーツ万能成績優秀なので正に好青年。
　女子一般が苦手。彼曰く強引で勝手だからと言うが…。なので女子には基本的に冷たい。身長１７２ｃｍ。

3話　本当のイミでの出会い

涙はきっと明日のかてに
悩んで、笑って、見つかるだろう
言葉に出来なくても、
ありのままに、声枯れるまで
言葉に出さなくても、
零した涙が洗い流すだろう

『ＧＲｅｅｅＮ　涙空より』

気分が落ち込んだ時はこの歌を口ずさむことにしている。
そうでないとそれに飲み込まれるから。

「ちょっとあさ～！何うたってんの～？」

「え？涙空、結構いい曲だよぉ～」

へらっと笑って返したのだが、内心すごく落ち込んでいて話しかけないで欲しかったなぁーと、思っていた。

「あーグリーンの？グリーンって結構いい楽曲だすよねー、愛唄とかさ～。ウチも好きだよ」

「だよねぇー、あたしバックスとかも好きだよ。Ｉｎｃｏｎｓｏｌａｂｌｅとかしんみり系が好み～」

友達とそんな他愛のない話で自分のブルーな気分を誤魔化しながら、学校への道を自転車で風を切って進んでいった。

「今日はテストだ～、ちゃんと勉強してきたか～？」

教師（たんにん）のその言葉でまだまだ馴染んでいないクラスは騒然とした。

「え～ウソー、そんなの聞いて無いよ～」

とか、

「ヤベー、俺勉強してきて無いよー」

とか言う囁きがクラス中で言われていた。

「もちろん言うわけがない、なんたって抜き打ちだからな！今更後悔しても遅いのだよー君たち！！」

とか抜かしてカーッカッカッカッカと笑っている教師もいい職業だな～、とか思ったりして…。

「テスト配るぞ～、机離しとけよー」

教師の号令（？）が下ると同時に、ガタガタと机を鳴らして移動す

る私たちって一体……。
まぁいいや、テストにしゅーちゅーしよ。

「テストどうだった〜？ウチは散々ー、つーか抜き打ちテストなんて卑怯〜」

「ウチはまぁまぁだった、あんなテストぐらいで大騒ぎしてるんならよく受かったねって思ったよー、あいつら」

あいつらとは皆堂英輔（かいどうえいすけ）様目当てで来た（ミーハー）女子共の事である。

「まーね、って言うかあさが優秀なだけだってばぁ〜」

「そっかな〜？ウチよりゆーしゅーな人はわんさかいるでしょーよ。例えば皆堂なんかそうじゃない？頭良くないとモテないでしょ」

「そーそー、あいつ（皆堂のこと）メチャクチャ頭良くてさー北高（きたこう）受けたけどギリギリで落ちたらしいよ。そんでもって滑り止めのこの高校に入ったらしい…って言うウワサ」

「なんて可哀想な…こんなうるさい高校なんか入りたくなかっただろうに……ご愁傷様です」

「ハハ…ま、そりゃそうでしょうねぇ〜」

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン

「ありゃ、じゃまた次の休み時間にね」

「うん」

放課後、各委員会があったので友達には先に帰ってもらって風紀委員会に行く途中、彼…皆堂英輔を見た。
たくさんの女子付きで。

「周りにあんな沢山の人が居たらさぞかし歩きにくそーだなぁ、人気なくてよかったかも…」

ぼそっと独り言……O型は独り言が多いらしい（よく分かんないけどネ）。
教室についても皆堂英輔の周りにはオマケ（ファンのキャーキャー女子多数）が纏わりついていた。
あれじゃあメモ取りにくそうだなぁ。

「え～では第一回前期風紀委員会を始めます。私は委員長の石井正（イシイタダシ）です、前期いっぱいよろしくお願いします…」

う～ん、なんだか真面目そーな名前…。
意外にも拍手が沸き起こった。つられて私も……。
オマケ達も律儀に拍手をしていた。
皆堂の前でいいカッコしてるだけだと思うけど。

「え～ではまず仕事内容から話していきたいと思います……」

石井の話す内容を私なりの解釈で、後で見たとき分かりやすいようにメモっていく。

ふと周りを見回すと、起きて真面目にメモしているのは私だけだった。
まぁー石井の話し方じゃー眠くなるのも無理はないかなぁ～とは思うけど、アンタ達あとで自分の仕事何だか分かんの！？とか思っちゃったり…。
あらあら皆さん大口開けてまぁ…気持ちよさそーに。
あっ、皆堂も寝てる！今のうちに写メ撮っておこーっと。
パチリ
撮っちゃいました、ハハっ。
もちろん音消しでやったのに、気配に気付いたのか皆堂クン起きちゃいました。
アラアラ折角の（皆が言うには）カッコいいお顔に寝グセが付いておりますわぁ。
などなどおちょくって心の中でナレーションを付けてみました。
そんな私の視線に気付いたのか、ムッツリした顔で皆堂がこっちを向いた。
ワッやばぃ！気付かれた？あ～後で何も言われませんように……。
マジ焦っている私の顔をちょっと眺めまわした後、彼の視線は離れていった。
あ～顔赤くなってなかったかな！？大丈夫か？わたし！
そんなこんなで、

「え～ではこれで第一回前期風紀委員会を終わります……」

と、石井正がいうまで生きた心地がしなかった…。
あ゛～、心臓に悪い……寿命縮まるよ～（泣。
そして片付けをして皆はまだ駄弁(だべ)っていたけど、さっさと教室を出て下駄箱に向かった。

「お前、さっきオレの顔写メで撮っただろ」
後ろからいきなり声がした。
いきなりの事だったから情け無い声を出して飛び上がってしまった。
「ひゃっ、ななな何のことですかイキナリィ！」
「…撮ったな、その顔じゃ『撮りました』って言ってる様なものだろ」
彼の濃紺の目は鋭い眼光を放っていた。
「……ご、ごめんなさい。べ、別に悪気があって撮ったワケじゃなくてその…」
「悪気があったからこんなことしてんだろーが、消せよ写真」
「ハイ……」
ピッ、ピッ……ピッ
「ハイ消しましたよ……」
「貸せよ」
「は？」
「だーからケータイ貸せっつってんだろーが」
「は、はぁ…」

私のスカイブルーのキーホルダーも少ないジミーなケータイが、友達の間ではウワサのカッコいい男の手に握られていると思うと笑えてきた。

「……ぷっ」

「何がおかしい？」

「あははは っ、だって私なんかのケータイがウワサのカッコいい男子の手に握られているんだもんっ、おっかし～、あはははははっ」

笑っている私を冷ややかな目で見つめる彼の目に気付いて少し黙った。

「お前もオレを好きだと思う1人か…？」

「は？何言ってんの、私はあなたみたいにチャラチャラしてる人なんて好きじゃないし、ハッキリ言うとキライ。でもさぁ、友達付き合いってのもあんじゃん？だから合わせてあげてんの、ケータイ気が済んだら返してよ」

彼の視線よりもっと冷たい言葉で返してやった。

ちょっといいすぎたかな？だったらごめんね～。

無言の彼が差し出す私のケータイを受け取って、靴を履きながら言った。

「ちょっと言い過ぎだと思ったから、傷ついてたらゴメンネ。とりあえず、もうあんたの写メは撮らないから勘弁してね」

と言った。

「じゃあね、皆堂英輔」

「ちょっと待てよ！！お前、名前は！？」

5歩ほど進んだところで後ろから皆堂が呼びかけてきた。
言うべきか言わざるべきかちょっと悩んだけど、答える事にした。

「鈴木あさ、あさは平仮名だよん」

いつものお気楽な口調でゆった。

4話　テストと高屋敷

注：今回は皆堂英輔（かいどうえいすけ）視点

アリエナイ女子との出会いから1週間…。
オレの頭はそいつの事で一杯だった。
そいつはいままでの女子とは１８０度、いや３６０度……って同じだ！
とにかくかなり違った。
どこが普通の女子と違うって言うと…
1．言いたい事をハッキリ言う（結構図星…だった、アレは……微泣）
2．オレの事を好きじゃなかった事（アレは心外だった。今までそんな女子しか居なかったからなぁ…）
まあ、ああいう女子の方がオレには向いてるのかも知れないけど……。
（とりあえず）今は絶対イヤだ！！
「おいエースケ、テストの結果が貼りだされてるらしーゼ！見に行こう！！」
「あ、あぁ…行く行く」
ボサッと考え事をしていた皆堂は友達の一言で我にかえった。
キュッキュッと昨日掃除したばかりの廊下は上靴の音を軽く響かせる。

ザワザワしていた人垣に近付くと女子のキャーと言う叫び声（もう慣れた）と共に、人垣がさっと割れた。
貼り紙を見た瞬間、周りの空気が凍りついた。
サーッと室温が2，3度下がったのが分かった（おっそろし～）。
ちなみに皆堂（とその取り巻き）が凍りついた貼り紙の内容は、

『250点満点中の点数上位50位をランキング

1位　鈴木　あさ　　250点中、250点　満点
2位　皆堂　英輔　　250点中、249点
3位　頭脳　馬鹿　　250点中、247点

……

……』

「恐ろしいな……この女……」

「東大志望のエースケに勝つんだからな……」

ゴクッと唾を飲む音が妙に大きく聞こえた。

「おい鈴木！ちょっとこっちこい！」

人々の雑踏に負けずに遠ざかっていく小さな背中に叫んだ。
振り向いたお目当てのひとつの顔は、少し迷惑そうな顔をしていた。
それより多く振り向いた数多くの女子の顔は、かなり悔しそうな顔をしていた。

オレ様に呼んで貰いたいのは自分の名前だって言わんばかりだ。
「何？用事なら早くしてよ、私急いでるんだから」
イライラした不機嫌な顔をしながら彼女は言い放った。
「ちょっと……ここじゃうるさいから空き教室行こうぜ」
「ふーん」
羨ましそうな顔、顔、顔、顔……目が回るぅ～。
その中で冷静に居られる彼女はすごいと思った（オレ的に……）。
少し雑踏から離れた美術準備室。
「何さー話って……」
「…お前って何でテスト満点とれんの！？」
「はぁっ！？」
ガバッと彼女の手を取りながら言った。
少し飽きれ気味の声がしたけど気にしない！気にしない！
「べべべべっつに…何もしてないけどぉっ？っていうか顔近い！！」
彼女も取り乱してるようだった。
その時、準備室のドアがバーンと音を立てて倒れた。
「きゃっ、なっなな何！？誰！？」

彼女も（オレも）ビックリしてパッと手を放した。
倒れたドアを踏み越えて来たのは、制服の胸の所がメッチャきつきつのむちむち3年女子だった。

「ちょっとそこのアンタ～！！ワタクシの英輔クンになに触ってんのよ～！！」

「？？いえ別に…向こうから」

「だまらっしゃ～い！！アンタから触ったに決まってるわぁ！」

「すっごいお嬢様キャラ……つーかアンタ誰っ！？」

オレ無視！！？

「ふふっよくぞ聞いてくれたわ、ワタクシこそこの高校1っ、お金持ちの令嬢、高屋敷美空様よっ！おーっほっほっほっほ……って聞けぇぇぇぇい！！」

彼女が熱弁を振るっている内に、オレと鈴木はこそこそと逃げようとしていたのに……気付きやがって。

「で、皆堂はもう私への用は終わったよね？」

「おう、もちろん」

「じゃ、私帰るね」

じゃっとばかりに高速（いや音速！？）で走り去る彼女を見て、オ

レも習った。
で、結局残されたのは高屋敷だけ……。
「なぜワタクシの話を最後まで聞かないのっ！」
と、憤慨してたそうな……。

5話　陰謀渦巻く……（前書き）

何かと急用があり、更新が遅れてすいませんっ！！

5話　陰謀渦巻く……

な、何だったんだ～！あのおバカ系超お嬢様キャラは……（汗
あんなの漫画でしか見た事ないぞ！（多分……）

「あーさー、なに1人でもんもんと悩んでんのよ～。頭の上に紫のモヤモヤが出てるよ」

「えっ、嘘っ！？」

「うそ」

「まぁそれはさて置き、高屋敷美空（たかやしきみそら）って知ってる？超お金持ちの…」

「知ってるも何もあーた、彼女（みそら）はこの学校でピカイチのワガママ嬢で有名よー、親父だかじーさんだか忘れちゃったけどあの！高屋敷財閥の愛娘だか一人っ子だかなんだって」

「へ、へぇ～。確か高屋敷財閥って不動産・オール電化・液晶&プラズマテレビ・ＩＴＣその他諸々の事業に手ぇ出して、それぞれでがっぽり稼いでるって言う…」

「そっちの知識はいいから！とにかく、すっごい所のボンボンよ。で、何で今更そんな事聞くの？」

「ん～それが皆堂英輔（かいどうえいすけ）に声掛けられて、テストでどうやったら満点取れんの！？って聞かれてー、しどろもどろしてる内に高屋敷が教室のドア蹴破って来て何だかんだ文句垂れてきてさぁ。うざっと思ったね、アレは。でもそんでもって皆堂に好意があるって勘違いさ

れて目ぇ付けられたってワケ。分かるかな……？」

「セっ、セリフ長っ。あんたも意外と大変ねー、そいつに目ぇ付けられて大丈夫だった女子は居ないっていうもっぱらのウワサだけど…がんばって！あたし、応援してるから！」

「人事かい！ま、人事だけどさ……」

更に落ち込む事になってしまった休み時間はチャイムと共に終わった…。

キンコンカンコ～ン

「なぁなぁ部活なんにする？オレ野球かサッカーで迷ってんだよね～」

「おっ、エースケがどっちかにでも入ったらその部活ヤバイ事になるな～」

「だな、なんせ運動神経バツグンのエースケだもんな」

ハハ…と談笑しているのは皆堂とその友達だ。

ただその友達は皆堂のファンクラブと繋がっており、皆堂の動向を逐一報告しているのだ。

そいつもめんどくせぇ事してんな～。

それを皆堂は分かっていて、こんな事を言ったのだった。

友1「ねーぇ、部活何にするぅ？」

あさ「ん～私テニス部！中学(まえ)は文化部だったから…太っちゃって」
友2「あたし剣道、外部活だと日に焼けるからさ～。かと言って文化部なのもね…ジミだし」
友1「そっか…ウチはもち吹部！中学でもやってたし～、またサックスやれるといいなぁ」
あさ「何だ結局みんなバラバラな部活かぁ、別にいいけど」
以上あさ達の談話でした☆

帰り際、気が向いたので入部届けを出した後、テニスコートに行ってみる事にした。
そこでは2，3年生が練習の真っ最中だった。
パコーンパコーンと見事なラリーが続き、そのラリーに気を取られていたあさは背後の人に気付かなかった。
パシュッと音がして向こう側の人のスマッシュが決まった。
「おー、すげぇな」
と、背後の人が言った。
「うわぁっ！！びっくりしたぁ。何だ皆堂か……」
「お前ビックリしすぎだっつの、テニスコートの人達が不信そーに見てるんゃねぇか」
見れば本当にテニスコートに居る人全員が、あんぐりと口を開けて

こっちを見ていた。
あさは恥ずかしさのあまり、顔がカーッと熱くなったのが分かった。
「そ、そう言えば何でこんな所に皆堂がいんの？」
「オレもテニス部に入ろうかな～と思って。あの五月蝿（うるさ）いハエ共にはサッカー部か野球部で迷ってるって騙してあるからさ」
「ふ、ふ～ん？」
まだドキドキが収まらないあさを見兼ねてか、
「保健室に行くか？」
と皆堂が肩に手を置きながら言った。
その手が置かれた瞬間、あさはビクッとして
「いいいいいーよ別に！もう帰るし」
と言ったが、
「じゃあ送ってくよ、家どこ？」
「いいって……」
「ちょっと待ちなさぁ～い！！」
『……でた』
2人がハモったのも無理はない。

額に『サッカー部マネージャー』と『野球部マネージャー』と書かれたハチマキをした2人…高屋敷と皆堂のファンクラブの会長がいたからだ。
う～ん。ディープインパクト。
会長「そこのアンタ！今皆堂サマに何しようとしてたのよ！！」
「べ、別に何も……（絶句）」
高屋敷「アンタ…どっかで見た顔だと思ったら、あの時皆堂クンに迫ってた女子ねっっ。どのツラ下げて皆堂クンの前に居んのよ！」
「ど、どのツラって……このツラですが」
会長「だ～、それが気に食わないって言ってるのよ！！とにかくっ、これから皆堂サマには近付かないで頂戴っ！全く、油断も隙もあったもんじゃないわっ」
「…別に私が会いたくて会ってる訳じゃないんだけどなぁ」
高屋敷「そんな訳無いでしょう！アンタが押しかけたに決まってるわ」
「だーかーらーっ、違うって……」
「そいつは何の関係も無い、オレが偶然会って話しかけただけだ」
それまで黙っていた（会話に入れなかった）皆堂英輔が口を挟んだ。
会長「そ、そうですわね。ではまたの機会に……」

そそくさと帰っていく2人を見て、あさがポツリと言った。

「アノ2人って何なんだろ？すっげー思い込み激しいけど…あの人たちの友達ってなんか疲れそう」

「た、確かに……」

「ちょっと（どころじゃなく）気疲れしたからウチは帰るね」

「あぁ…またな」

「あ～、あんなのに構ってないでさっさと帰れば、無駄な時間使わないでもすんだかも……」

6話　鈍感にもほどがある

ん～今日は部活初日かぁ……

「あさ！何1人でぶつぶつ言ってんのっ、気味悪いじゃない！」

「あ？ぶつぶつ声に出しては言ってなかったつもりだったんだけどなぁ」

「アンタがそのつもりじゃなくても、周りの人にぶつぶつが聞こえてたのは事実」

「あ、そう。ごめん」

テキトーにあしらってやっぱりボケ～っと考え事（途中から妄想）をしていた。

あ～今日は部活初日……か。

「おいエースケ！お前って独り言言うキャラだっけ？」

「え？オレ独り言なんか言ってたのか？…そんなつもりじゃなかったんだけど」

「そのつもりなくても言ってたよなぁ？」

「うん、いつになく大声で」

「あ、そーか。ごめんな」

「部活って言えば、英輔って最初サッカー部か野球部で迷ってるって言ってたよなぁ。でもその後で何でテニス部にしたんだ？」

「そうやって惑わせておけばキャーキャー女子が少しは減るじゃないか」

「あー、まぁそうだけど…その情報信じてサッカーと野球のマネージャー志願が増えて困るって部長達が言ってたぜ」

「別にいいだろ。あいつらも相当溜まってるだろうし、ちょうどいい捌け口を用意してやったんだから逆に感謝されてもいいと思うな。…高屋敷と有須川（ありすがわ）なら」

あ、有須川ってのはファンクラブの会長の事ね。

「まぁ確かに…（苦笑）、俺もあいつらなら一回はヤってみたいし」

後半きたない会話になってしまってすいません。
イイ男子が2人して妖笑みを浮かべている絵図はかなり怖いものだった（女子には）。

「わ～遅刻だぁー！！」

何故にあさが学校中を走り回っているのかと言うと、

1：当番だったので学級掃除とプリント配りを平行して行っていたため、転んだ際に集めていたゴミと大量のプリントを撒き散らして

しまい、集めるのに一苦労だった。
２：更に風紀委員での仕事も重なったため、先生のパシリにされていたわけで……

以上の点により、かなり時間をロスしてしまった訳で…と言ってもロスした時間は１０分程度なんだけど。
靴を履き、鞄を引っ掛け、メガネのズレを直し、一回躓き、ながら所定のテニスコートに向かった。

「おっくれてすいませ～ん！！当番の仕事と委員会の仕事がかぶったもので…」

「ま、まぁまぁ落ち着きなよ、まだ来てない奴らも居るからさ」

先輩らしき女子が話してくれた。
まだ息を切らしているあさは、テニスコートの人たちが笑っているのを見てかなり恥ずかしくなった。

「あ…そうですか。すいません、騒がしくて」

と、真っ赤になりながら言った。
どうやら新入部員は１０数人、これだけの様だ。

（あの超ウワサになってる皆堂が居るワリには意外と少ないなー…それだけこの情報が出回って無いという事か）

赤くなっている割には冷静に観察しているあさは置いといて、テニスコートの周りがかなり五月蝿かった。

（あの入部希望の中に確か移動は許されないって書いてあった……

つまり周りのキャーキャー女子は入って来れない訳か）

「上手い事なってんな～」

あっ…つい独り言が……。

「え？何が？」

隣に居る先輩が聞いてきた。

「あ、部活の移動はないって事です。周り五月蝿いんで」

「あ～確かに…あっ、やっと来た！遅（おせ）ーんだよ皐月（さつき）ぃ！」

先輩が向こうの男子に叫んだ。

「ごめんごめん、じゃあ新入部員もいる事だし早速自己紹介でもしてくんないかな？そこの隅っこの子から」

って私？どどどどーしよ（汗

「えっと1年3組の鈴木あさです、好きな事はメガネ集めです」

「私は波木梨花（なみきりか）です！得意な事は料理全般でとくにお菓子作りが好きです！」

あ～コイツも皆堂の事ちらちら見てるってー事はきっと好きなんだな。

確かに自己紹介ってのは自分をアピールする時だけど……ちょっと目的違うと思うな。

それからかなりの女子と男子が自分をアピっていって次は皆堂の番になった。

「俺、高木祥平（たかぎしょうへい）、好きな事は…やっぱ運動かな」

男子も女子にモテようと必死だねぇ。

「1年2組皆堂英輔、最近の趣味は…雑談かな」

う〜む、シンプルイズベストな自己紹介。

私もあーゆう自己紹介にした方がよかったかな？

「1年生は全員終わったか…じゃあ俺も。峯皐月（みね）、部長やってまーす」

「あれ皐月言ったの？…しょうがない北嶋翔子（きたじましょうこ）です、得意な事…やっぱりテニスかな」

一通り自己紹介が済んだ後、皆でファミレスに行って打ち上げ（？）をやった。

でも私と皆堂は断った。

私は勉強があったし、そーゆーどんちゃん騒ぎはキライだったからで。

皆堂は女子に絡まれるのがヤだったんじゃない？

そーゆーワケで一緒に帰る事になってしまった。

彼曰く、女子が1人で歩いてると顔はどうあれ、危ないからだそうだ。

「そーいえば皆堂ってウチにはよく話しかけるけど何で他の女子には冷たいの？」

「……別に、そういうわけじゃない」

あらまー、急にむっつりしちゃって。

「嘘だぁ～、だって今日凄く静かだったじゃん。何で？」

「うるさい」

「ねー何でってば～」

「……お前そういうところは鈍感だな」

「え？どういうところ？」

「…もういい、帰るぞ」

「どこどこどこどこどこ～？」

住宅地に虚しく響く質問。

「ねぇどこなのさ～！？」

7話　告白現場

いろいろ考えさせられる事があった部活初日……。
結局の所私のドコが鈍感なのさ！？

「ねぇねぇ、私って鈍感？」

友1「う～ん…何て言うかあさって鋭すぎて逆に鈍感みたいなトコがあるよーな」

友2「そうそう！なんかウチらの行動全部分かってて、一歩踏み込みすぎて全然違うみたいな？あっ、日本語になってない……（汗」

「な、何だかよく分からないけど……そんなもんかな？」

友1「多分あさだけだよ、ソレ」

「まだ時間あるよね……私トイレ行ってくる」

今日も部活がある…大丈夫かなぁ？何か変な事やらかしそうな気が……。

うん、今日こそしっかり部活やるぞ。
あんな女に惑わされずに……。
皆堂英輔は騒がしい教室の中で1人、決意を固めていた。

「皆堂さんちょっといいですか……？話があるんですけど」

その時、オタク系の女子が声を掛けてきた。
クラスでは見た事無い…他のクラスか。

「いいよ、どこで話す？」

「あの……廊下でいいですか？」

その女子について廊下に行った。
廊下はかなり騒がしかったが女子が連れて行ったのは、あまり人の居ないトイレの前。

「あの……付き合ってくれませんか？」

その女子は恥ずかしそうに俯いて耳まで真っ赤になりながら言った。
そこまでなるなら言わなきゃいいのに……と、こんなシーンを何十回と体験しているオレは思った。

「あのさ……無理だっての分かってる？」

流石に自分でも冷たいな…と思うのだから、言われている女子はかなりの衝撃だろうなと心の隅で思った。
よくよく考えれば誘われた時点でそんな事になるって事は容易に予想できたのに、それを回避しようとしない自分は何て欲深いのだろう…。
いや、欲求不満？
そうだ、手に入らない者への欲求不満……。
それだ。

「何で…ですか？付き合ってる彼女もいないし…あなたの事だから好きな人も居ないんでしょう？だったら……」

「あのさぁ。まだ好きじゃないけど好きになれそうな奴ならいるからさ、今努力してるとこなの。だから邪魔されっと、ウザいんだよね」

「そう…ですか。聞いてくれてありがとう、じゃあ」

その女子は名前も言わず、上靴をキュッと鳴らして去っていった。

「あの……付き合ってくれませんか？」

その声が聞こえたのは用も済んで、手を洗っている時だった。
びっくりして思わず流していた水を止めて（ついでに息も殺して）聞き入っている自分が居た。
（こここここれはウワサに聞く、こここここ告白シーンではないか！）
数秒の沈黙の後、男子の声が聞こえた。

「あのさ……無理だっての分かってる？」

その声は皆堂のものだったが、いつも自分と会話している時のような柔らかく耳に心地よい低音のそれではなく、冷たく無慈悲な鋭い声だった。
多分教室で誘われてここに来たのだろうと思うけど、こんな事ぐらいイヤって程体験しているはずなのに、それを避けようとしないって事は自分がその女子に与えている影響を分かってないし、自分の欲求不満を隠してるとしか見えない……。
今までの人間ウオッチングのノウハウをフルに活用して皆堂（ソイツ）の気持ちを考える。

「何で…ですか？付き合ってる彼女もいないし…あなたの事だから好きな人も居ないんでしょう？だったら……」

「あのさぁ。まだ好きじゃないけど好きになれそうな奴ならいるからさ、今努力してるとこなの。だから邪魔されっと、ウザいんだよね」

…冷たい声。あれじゃー相手の女子もキズつくわな。
好きなれそう？なってやるみたいな言い方。気に食わね～。
それを自分が手に入れれなくてイライラしてんだろうな～。

「そう…ですか。聞いてくれてありがとう、じゃあ」

嗚呼、相手の女子のほうがよっぽど偉いな…。
ヤバっ、授業始まっちゃうよ～！
この状況で部活ん時皆堂に会うのって気まずい……。
あ、でも皆堂でも手に入らない女子って一体だれだろ？

8話　帰り道～1～

暗い気分に浸りながら部活場所であるテニスコートに向かっていた。こんな気分を引き摺りながら部活をしちゃった日にはすんごいミスをするって分かってるのに、それでも、この気分を払拭できないのはあの言葉が胸に突き刺さっているから。

『あのさぁ。まだ好きじゃないけど好きになれそうな奴ならいるからさ、今努力してるとこなの。だから邪魔されっと、ウザいんだよね』

そこまでしてその女(ひと)を手に入れたいって言うんなら、それをふる理由に使うなよって感じ。

これだから男は信用できないし、みんな同じって思っちゃうんだから。

テニスコートに着くと峯(みね)部長と北嶋先輩がいた。

峯「おー来た来た。これで1年生全員集合！と言うわけで早速だけど俺らの試合が終わるまでにテニスコート５０周！をやってもらいま～す」

北嶋「あ、ちなみに試合ってのはゲームセットまでね。分かんなかったら勉強するべし」

1年「……ハイ」

峯「あーそーだ、返事の声の特訓は明日でーす。声枯れるからその辺は自己管理でお願いします」

北嶋「ラケットとかシューズとかは自分で用意しといてね」
もう何も言う気が無くなった1年たちはすごすごとテニスコートの外に出て、走る準備をし始めた。
「…試合終了(ゲームセット)後の自分が想像できる。死んでるな、このメンバーの半数」

試合終了(ゲームセット)

…予想通り。
皆さんバテバテでーす、死んでまーす、魂抜けかかってまーす、ヤバいでーす、目がハンパなくイってまーす。
そういってる私も死にそうです。
平気な顔して立っているのは皆堂だけ。
ば、化け物だアイツ……。

峯「おーおー、目がヤバいぞおめーら。にしても皆堂は凄いなー、俺でも1年の時死んだから、コレ」

……だったらやらせんなよ!!
全員(いちねん)の刺すような視線を物ともせず、へらへら笑っている峯…部長。
ある意味部長の品格が出てます…!

北嶋「峯ー!なに1年イビってんの、もう終わりなんだからさっさと部活終わらせてよ」

峯「はいはい、さー来いよ1年」

ま、周りから無数の殺意がする……（汗
兎にも角にも早く終わらせて帰らせてくれ～！
峯「はい、それでは今日の部活を終わります」
部員「ありがとうございました！さようなら！」
峯「1年はボールの片付けをしてってから帰ってね、そんじゃ宜しく～」
夕闇にぼんやり浮かぶ（テニスコート三面分に広がる）黄色いボール……膨大なこの数を片付けてから帰ろと！？
殺す気ですか！！？

9話　帰り道～2～

ようやく片付けも終わり、若干汗の匂いが気になって仕方なかった。
そういうトコロはやはり自分も女子なんだなと思う。
同じ部活に喋りながら帰るような仲のいい友達もまだ居ないから、
薄闇の中をさー帰ろと1人で自転車置き場に向かって歩き出した。

「……木、おい鈴木！聞いてんのか？」

皆堂だ。

「あんま聞いてなかった、なに？」

「…まぁいいか、一緒に帰んないか？」

「え？皆堂の家って何処にあんの？」

「翠ヶ淵（みどりがぶち）の方、鈴木もそうだろ？」

「うんそーだけど…何か企んでない？」

「は？何を企むって言うんだよ」

「ま・そりゃそーだ、うんいーよ帰ろっか」

からからから…車輪の回る乾いた音がする。
季節は春だけど夜は寒く、その音もあってそこだけ木の葉舞う秋になったようだ。
……な、何を話せばいいのか…（汗

「おい鈴木！なーに渋い顔してんだよ」

「へ？」

「へ？じゃねーよボケ」

「ぼ、ボケって何よボケって！」

「悪(わり)ぃ、つい…本音が」

「本音ねぇ…まいいけどぉ。アンタみたいに華々しい人間にはあまり接してこなかったからさ、何話せばいいかわかんなかったの」

「華々しい…か、そうだなダチに鈴木みたいな暗っぽい奴はいないからな。そういう暗い人たちにすりゃー、オレなんかスポットライト浴びまくりの人間だからな」

「まーね、今でさえ皆堂なんかと喋ってるなんて信じられないもん」

「ははははっ、そうだな」

少し明るくなった雰囲気の中、柔らかな重低音の声が冷たく響いていたのを思い出した。

『あのさぁ。まだ好きじゃないけど好きになれそうな奴ならいるからさ、今努力してるとこなの。だから邪魔されっと、ウザいんだよね』

それを思い出し、またふっと暗い気分になった。

その様子を見た皆堂は、

「どーした、なんかいきなりテンション下がったな」

「何でもない、ちょっと忘れてた宿題思い出しちゃってさー」

「あー英語の？あのセンコー宿題出しすぎだよな」

「そうそうそれそれ」

上手い具合に誤魔化せたなー、と心の中でガッツポーズ。
あははは、と笑いながら心は暗く重い闇の中。

「嘘つけ、ぜってー違うだろ。なんかあったか？」

「だっ、なんにもないって」

ちょっと焦った。
マジィかも……（汗
だって皆堂の目がめっちゃ細くなって怖いんだもんっ、ひえ～。
イケメンの眼力ってすごいかも……。

「嘘こけ、正直に話せよ。それとも吐かせられたいのか？」

ひ～！！怖いっス！
背後に鬼が見えます……！！

「はっ、話すから怒んないで！頼むから」

「はぁ？何でお前が落ち込んでる理由聞いてオレが怒んなきゃいけ

ないんだよ、意味わかんねー」

「……あのね」

１０話　帰り道～３～（前書き）

更新が遅れてほんっっとすいませんっ！！
新学期でドタバタしていたり、作者に降りかかった災難（身体測定）の結果に打ちのめされていたり……。
体重より身長が１６５ｃｍになった事の方がショックです…。
身長の小さい人に５ｃｍ差し上げます！！
ホント。

１０話　帰り道～３～

人気の無い神社の横を通っているときだった。

「……あのね、今日の休み時間にトイレ前で告られたでしょ。あん時私トイレの中に居てあの会話聞いちゃったんだよね」

「…それがどうしたんだよ」

「ぶっちゃけ言えばすごくムカついた」

「は？」

「あの好きなれそうって言ったヤツ、なってやるみたいな言い方だから気に食わなかったし。それに何か欲しい人がいて、その人を自分が手に入れれなくてイライラして言ったのかもしれないけど、それは望みすぎだと思う」

「……何故そんな事が言い切れる？別にオレの心ん中読んでる訳じゃねぇだろ」

「そりゃまぁそうだけど、私の勝手な解釈で」

「…鈴木ってホント不気味だな」

「不気味で結構、小学生のときも中学生のときもそれでイジメられましたから」

「そーゆー不気味さじゃなくて、鋭すぎて不気味だって言ってんの

オレは」

「あ、そう？って事は全部図星だったりすんの？」

「全部、図星です。悪かったな単純で」

「男子とかって良く言うと純粋だけど、悪く言うと単純だしバカだよね」

「少なくとも一般男子はそうだな」

「…自分はバカじゃないって言いたいの？お生憎様、私から見れば皆堂も他の男子とあんまり変わんないよ。…まぁ、『キャー英輔様素敵～、こっち向いて～！』なんて言ってる女子の方がバカっぽく見えるけどね」

「っぽく見えるってどういう事？」

「とどのつまり、他の女子を蹴落とす為の悪知恵と労力は惜しまない所が男子のイジメより性質（タチ）が悪いって事」

「……さすがイジメ経験者。迫力が違うね」

「あと私、茶化す男子も嫌い」

……皆堂英輔、撃沈。

ゴーン……。

除夜の鐘が脳裏に鳴り渡ります。

この女子、意地でも手にいれてぇ。
今まで幾百の女子を散々手玉に取ってきた男・皆堂、完全に裏の性格に火が点いてしまいました。
まぁ、頭もいいし顔もいい。
それだけが取り柄といってもいいもので…。

「あ、私ここの通りの突き当たりの白い壁の家だから。そんじゃーまた明日」

「あぁ、また明日……」

既に後ろを向いていたあさは知らなかった。
妖しい笑顔を浮かべた皆堂英輔がどうやってコイツを手に入れようかと考えていた事を。
怖っ。

11話　想いを缶詰に【1】

カチャッ…カチャカチャ…カシッ……「うあ～！」

母「ウルサイ！朝っぱらから何やってんの、ゴールデンウィークだからって丸々一日中パソコンしてるんじゃないでしょうね！？」

「そんなこと無いって～、今日部活だし～」

母「そう？それならいいけど…あ、私出張だからお弁当はその辺のコンビニで買って行ってね」

「後で代金請求するぞ」

母「はいはい、じゃーよろしく～」

つくづく似た者親子である（まぁ親子なんだから当たり前なんだけど）。

「おはようございま～す！！」

峯「お、来たなー鈴木あさちゃん。筋肉痛で来ないかと思ったよ」

「そんなことないですよー、何か準備する物ってありますかね？」

峯「あそーだ、部室にヨネック○の新品ボールの缶が開いてないから開けてきといてよ、後からくる他の1年にも言っとくから」

「は～い、わっかりました」

……ちなみに運動部の部室は校舎の影にあるので先生に見つかりにくい。ので、カップル達の格好の隠れスポットになっていたり、不良（ワル）どもの溜まり場になっていたりと意外と人気が絶えない。

カラン…ごろごろ……

「…新品の缶開けんのは別にいいけどさー、こんなにあるなんて聞いてないぞ」

部室にはざっと１００個ほどが山積みになっていた。

「しゃーない、やるしかないか。しっかし多いな～、相当な出費だったんだろうな」

そんな事をぶつぶつ文句言いながら缶を開け、かごにあけた。

からからから……

「あ？誰？」

「あ？誰？じゃねーよ、朝っぱらから来てみれば部長（みね）が缶開けしろって言ってきたからきてやったんだぞ」

「なぁんだ、皆堂かぁ。手伝ってよぉ、ゼッタイ１００個あるよーこれ」

「はいはい……」

もちろん皆堂にそんな気はさらさら（と言っても部長に言われたからやらないといけないんだけど）なかったが、あの夜の屈辱的な想

いを忘れてはいなかった。
…これは大チャンス。
彼女(あさ)は無防備（つっても知らないんだからしょうがないんだけど）に缶を開けている。

「…んっ……よっと」

気付けばあさはキレイに積み上げられた缶を段の途中から抜いている。

「…何してんの？」

「あは、面白いでしょー。ジェンガみたい！」

「いやそーじゃなくて……、崩れたらヤバいって（汗」

冷や汗ダラダラの皆堂を尻目に、あさは缶を抜いてはゴロゴロと中のボールをかごにあけた。
笑いながら。
よーやれるなぁ。

「ちょっと待……あ！」

「あ」

がらがらがら…
崩れた。

「あーあ、かなりいい所までいってたんだけどな」

「な、なーにがいい所だよ！崩しやがって！」

「え～崩したらまずかった？」

「いやそーじゃなくて（汗」

何だか出鼻を挫かれた感じが……

あ、次の話に続く……。

12話　想いを缶詰に【2】

からん……ごろごろ

「あーあ、崩れちゃったか。残念」

彼女はそう言って缶開けを再開した。
オレにとっちゃー大チャンス。

「あさ…」

「は？何？……！」

缶を左手に持って振り返ったあさの肩から5ｃｍ先には皆堂の整った顔があった。
皆堂がまた名前を呼び、一歩を踏み出す。

「あ！そこは危な……！」

ずりっ
！
ずべしゃっ

「だから危ないって言ったのにさー、聞ーてねーんだからホント困るよ」

急に外がガヤガヤと騒がしくなった。
からからと部室の扉を開けたのは他の1年たち。

「あっ、もう来てる人いんじゃん。ってゆーか英輔なんで寝てんの？」

「もーしかして缶に躓いてコケたとか？」

「うわダサくね？」

先頭の男子が口々に言う冷やかしを黙って耐える皆堂。
まぁ元はと言えば自分が蒔いた種は自分で刈り取らねばならない。
そんなトコかな。

で、かくして皆の協力により１５分後の部活開始時にはかご１０個がテニスボールで埋まっていた。

峯「おーおー、やっぱスゲェなぁ。缶１００個分のテニスボールってのは」

１年（やっぱり１００個あったのかよ！！）

１年の一斉ツッコミ。
そー思うのも無理は無いと思うけど……（汗

峯「意欲の有る１年生諸君！今日もテニスコート５０周だ～！！」

１年「……え～～～～！！またぁ？！」

峯「えーではない、はいだろはい」

１年「……はい」

峯「ほら行った行った」

……部長ドＳですか！？

峯「お疲れさーん、今日の部活はこれで終わり。あ、当番の一年は片付けしといてね」

私当番じゃん！

うわ～ん、今日アニソン取り込もうと思ってたのに～。

がちゃがちゃ…

ごそごそ…

カシャッ

部室の鍵を掛けて振り向くと峯部長がいた。

「っ何ですか部長！なんかまだやる事ありましたか？」

峯「…別にないんだけどな、俺の用事はあるから」

「？」

結構女子の中では背の高い私でも、高校３年の男子にはかなわない。

部長って１８０ぐらいあるんじゃないかな？

「何の用…ですか？」

峯「その前に眼鏡外しなよ」

「…こうですか？」

峯「そうそう」

にっこり笑った先輩の顔は校舎の窓ガラスに反射した夕日の逆光でよく見えなかった。
良く見ようと目を細めたとき、口唇に暖かいモノが触れた。

「！？」

それは一瞬だったから良く分からなかった。
慌てて見上げると笑みを浮かべた先輩がいた。

峯「あさちゃん可愛いんだからもっと自分に自信を持ったほうがいいよ、って俺が言えた義理じゃないんだけどね」

ぽかんとしている目の前の後輩がとても可愛かった。

13話　想いを缶詰に　【3】

※今回は2人の男子（皆堂と峯）の視点

後ろの方で身動きする気配がした。
まぁ、皆堂君ってとこか。
見てな、これが大人の男ってもんだ。
鍵を掛けて振り向いた彼女は驚いた声を上げた。

「っ何ですか部長！なんかまだやる事ありましたか？」

「別にないけど…俺の用事はあるからさ」

「？」

「その前に眼鏡外しなよ」

「はぁ…」

かちゃと、眼鏡を外した彼女は思いの他可愛く、自分のしている事が汚らわしく思えてきた。
目を細める彼女の口唇に軽く口付けをした。

「！？」

「あさちゃん可愛いんだからもっと自分に自信を持ったほうがいいよ」

先輩からの優しいアドバイス☆
じゃないけどな。
もっと磨けばいい女性になれるよ、君は。
それを狙ってる男子もいるようだけど。
君は君らしく、真っ直ぐ生きていけばいい。
周りに流される必要なんかない。

もうとっくに帰った筈の峯が、まだ部室の前でうろうろしているのを見た時は正直ビックリした。
部室の扉が開いてあさが出てきた。
…そうか、当番だったんだ。
びっくりして何か言っているようだけど、ここからではよく聞こえない。

「っ……部長！な……だやる……たか？」

「……ないけど…俺の用事はあ……」

俺の用事？なんだそりゃ。
彼女も不思議そうな顔をしていた。

「……前に眼鏡外……」

眼鏡外して何をするんだよ。
！

峯が彼女の口唇にキスをした。

彼女も驚いている…という事は、付き合ってるわけじゃねーんだな。
よかった…。
って、何安堵してんだオレは！
妙に次の言葉が大きく聞こえてきた。

「あさちゃん可愛いんだからもっと自分に自信を持ったほうがいいよ」

…女として目覚めのキスを施したつもりか。
彼女の何を知っている？
まぁオレが言えた事じゃないんだけど。

相手の一部分を知ったからって、相手の全てを知っているわけではない。

そこんとこ勘違いしている人間がたまにいる。

相手は自分じゃあないのに。

１４話　過去と未来

シャアァァ…
シャワーを浴びながら考える。
口唇に触れた柔らかな温もり。
ずっと求めていた安らぎ。
優しさ。

時は１９９０年、バブル期最後の年だった。
私の父親は大手パソコンメーカーの秘書をしていた。
秘書ってのはいわゆる社長の何でも屋だと父から聞いた。
海外の取引先に行くときの護衛とか、通訳とか…とにかく何でもやってたそうだ。
母は有名なデザイナーでジュエリーから和服、生活インテリアまで…そこそこ儲かっていたらしい。

バブルがはじけた年のある春休みの日、父親の会社が倒産した。
バブルがはじけた煽りで父の会社も多少のダメージは受けたそうだが、これからを担うパソコン機器だけに倒産など有得ない事だった。
後になって分かった事だが、父の会社が国内で多く納品していた企業がフロント企業だったらしい。
あ、フロント企業ってのは暴力団が一枚噛んでる企業の事で。
当時恐れられていた『連鎖倒産』だった。

それから父は再就職もせず、家で酒に溺れて暮らした。
ただでさえリストラされる人が多い中、４０過ぎのおっさんが再就職するところなんてなかった。
母はそんな父を見かねて、昼夜を問わずに馬車馬のように働いた。
お陰で元々体の弱かった母は体調を崩して入院した。
それから数ヵ月後に私が生まれたそうだ。
しかし父では私を育てきれない為、私は祖父母たちの家に預けられた。
その間、母の看病は父がしていたらしい。
やっと母が退院してくると聞いた。
そして母が家に到着してから1時間後、祖父母と私が家に着いた時。
家の中は血の海だった。
私の父親は将来を悲観して、幼い私を残して母と無理心中をしたのだった。

シャァァァ…
水が表面をなぞるように流れる鏡に手をつき、鏡の中の自分を見る。
平均以上とは言えないが、しっかりと存在感のある年頃の女子の体つき。
あの頃から年月は流れ、赤ん坊だったあさも高校生になった。
『この子の名前はあさ。どんな日でも夜は明ける、それを知って欲しいから』
病院を出る前、母が言っていた言葉だと言う。

母の願いを受け継いだ名前、そう思いたかった。
その名の通り暗いイジメと言う名の夜も耐え忍び、無事に朝を迎えた。
高校生になって自分もそういう歳になったんだなぁ、と思う。
部長の優しいくちづけ。
何で自分なんかにしたのかは分からないけど。

１４話　過去と未来（後書き）

のわあああぁぁぁぁ～～ーー！！
おっくれてすいませぇぇーーーーん！！
もー土下座土下座土下座っ
すいませんすいませんっ（大泣
あ、その前にどれだけ待ってくれた人がいるんだろう……？

15話　回想

あの子は埋もれさせたら勿体ない。
そう思ったからキスしたんだ。

綺麗な目をしたコだなー

それが第一印象。
…ん～、僕だってそりゃー1度や2度は女のコと付き合ったことくらいあるけどさ。
寝た事だったある。
でも、あーゆーコは初めてだな。
え？
どーゆーコかって？
ん～、何ていうか…純粋？
それとも…？
まぁそんな事はどーでもいーんだけど、ようするに変なコだって事だよ。
異常（ふつう）な人たちにとっては、ね。

時々そういう人に出会う事があるけど、そういう人って必ずイジメとか。
そーゆーのに遭ってるんだよ。
かわいそうだけど、どうしようもないんだ。
僕だって当時（とか言いつつも小学校高学年から中学ぐらいまでなんだけど）は、影薄い方だったから助けたくても助けられなかった。
思春期の入り口のおこちゃまたちは、華やいでいる人を何かとマネして。
んでその基準の人に合わせない人達を、何かにつけて差別したり？

暴力だったり？して排除するわけですよ。
現在の何も知らない大人諸君。
もうちょっと、脱ゆとりとかイジメ撲滅とかとやかく言ってないで、
体育館裏とか器具庫の中とか部室とか。
目につきにくい所にカメラつけたら面白いものが見れるぜ。
今まで優等生と思って可愛がっていた男子生徒が、心優しい穏やかな女子生徒が。
あんた達がただの友達と思い込んでいた子にどういうことをしているのかを、な。

それを知っていながらチクれなくて

そこまでの勇気がない自分を責めてみても

何にもならなくて

幾ばくかでも誰かの人生を変えてみたかった

自分の人生は変えられないくせに

その為だけに彼女を利用しただけかもしれない。
あーあ、また自分の浅ましさにイライラしてきた。
でもあれだけで彼女が変わるかどうかは、彼女しだいだけど。

僕たちは柵（しがらみ）のなか

ちっぽけな世界をすべてとおもって

ぶら下がって

いつか誰かに落とされたと
思い続けていて
でも本当はわかっているんだ
手をはなしたのは
じぶんだと

１５話　回想（後書き）

どうも、葉月です。
今更こんなコト言うのもアレですが……。
小説のストックが無くなってしまいまして…（汗
更新が４日に一度くらいになります。
ごりょーしょー下さい。

16話　…これから、何を？

「イテテテ……」

北嶋「もー、ムリするからぁー。…足首大丈夫？」

あさはコートの隅に座っていた。
何でかって言うとぉ、足首の捻挫。
相手の高いスマッシュを追いかけていて、足元のボールに気付かなかった。
それだけ。
北嶋先輩がとりあえずの応急処置をしてくれたが…。
ズキッ

「痛っ、あっ」

北嶋「あ～、まだ歩いちゃ……！」

ドテッ

「いったぁーい！もぉ～」

峯「おいおい大丈夫か？保健室までおぶってってやろうか？」

北嶋「もー、そーして。じゃないとこの子足引き摺ってでも行くからさ」

「！！っ大丈夫です！これぐらい…あ！」

ドッテーン

峯「…大丈夫じゃなさそうだなぁ、…よっこいしょっ」

北嶋「それが賢明かもね、大人しく保健室に行ってきなさいよ」

「きゃあっ…せせせせ先輩っっ！！私なら大丈夫だって言って…もごっ」

峯「しゃら～っぷ、ちったぁ大人しくしてよ」

「……」

テニスコートもとうに過ぎてプールの裏に来た。

ん？こっちは保健室じゃな…

「先輩、こっち保健室じゃないですよ」

「ん～、だってそうだもん」

「え？」

どさっ

「きゃっ。…なっ何ですか！？」

ずいっと顔が近付いた峯に抗議。

「何って……社会ベンキョー」

「はぁ？」

「あんまし油断してると、こーなるよって。そんだけ。でも折角ここまでやったんだし…」

ゴクッ

自分の唾を飲む音が聞こえた。

「なーんてね、んな事する訳無いって。どこぞの誰かと一緒にしないでよ」

「はぁっ…よかった」

「でーもー、何にもしないとは言ってねーもん」

「え、何言っ……んっ」

口唇を塞がれた。

しばらく暴れていたが、ビクともしなかった。

この辺で男子と女子の力の差と言うか、体格差を思い知らされる。

「…っあ」

「ハイ、お終い。さっ、保健室行こうか」

キョトーン、としている彼女を背負って、今度こそ保健室に向かった。

１６話　…これから、何を？（後書き）

…随分間が空いてしまいました。
すいませんっっ！！
次話は５月…う～ん１１日になると思います。
修学旅行があるもので…。
京都と奈良に行ってきます。

17話　トーナメントにて

「…あっつい！！」

「同感」

「右に同じ」

「左じゃない？」

「…いいじゃない、それぐらい！！」

あさ達1年生は炎天下での先輩達の試合の応援に疲れ、試合の合間にやっとこさ見つけた日陰に打っ倒れた。

パシャッ

ペットボトルの中の水が揺れる。

峯「おーおー、お前らヒマそーだな。俺は汗水流して試合に勝ってきたところなのによぉ」

「すごいですねぇ！相手どこの高校でしたか？」

峯「どこだったかな…、高堂だったか水梨だったか…？」

「結構違いますよ」

峯「ん～、あっそうだ！聖隷だった！」

ドテーン！！

「先輩！前の２つの名前とも全然違うじゃないですか！！」

峯「あ、そーだな。あははは…」

ゴチッ

峯「いて」

北嶋「なに油売ってんのよ、夏合宿の話をしに行ったんじゃなかったの！？」

「あ」

峯「わーったわーった、今からするから」

北嶋「ったくもう！」

「……それで夏合宿ってのは？」

峯「いつもこのトーナメントの後の夏休み始めぐらいに、選手の強化合宿をやるんだ。１年生もそこで本格的にテニス教え始めるんだよね」

「へぇ～、どこ行くんですか？」

北嶋「千葉の……どこだったっけ？」

峯「九十九里浜の方だって聞いてるよ。副部長なのに聞いてなかったの？」

北嶋「だって先生があやふやだからー」

「……先生？」

峯「…あ、そうか。おめーらあのふざけたセンコー見た事無いのか。っつーかオレだってあんなの見たくもねー」

北嶋「いつも峯の言う事には、ムチャクチャすぎて賛成できなかったけど…今回ばっかりは大賛成するしかないわ」

「ど、どんな先生なんですか？」

北嶋「その内に、嫌でも遭うから…そん時にじっくり見て」

峯「どっちかって言うと、遭遇だな」

2人して影背負って話されると怖いです！！

…その先生ってどんだけ怖い？変？なのー！！

１８話　夏合宿！　初日（前書き）

何だか急に夏編に突入してしまいましたが…。
すいません、作者の都合でネタが思い浮かばないと言う緊急事態なので、かねがね考えていた夏編にぶっ飛びます。

１８話　夏合宿！　初日

カンカンと照りつける太陽。
パシャパシャと波しぶきに戯れる友人達。
う～、夏だ！！
イェイ☆
パコッ
「いてっ」
峯「お前まで浮かれてどうすんだ。一年代表なんだろ」
ちょこっとムスッとした峯…部長が太陽を背負って立っていた。
何で不機嫌になって…？
んーもしかして…
「先輩、泳げない？」
峯「なっ、そんなこと無い！！」
すると峯の高い背の後ろから、身長差約２０ｃｍの北嶋がひょこっと顔を出した。
北嶋「おっ、あさちゃんイイとこ気付いたねぇ♪コイツめちゃめちゃカナヅチなんだ」
峯「ななな何言って……おい北嶋！」
北嶋「あはははっ、やーいカナヅチカナヅチ！！」

「……あの（汗」

2人は追いかけ、追いかけられて遥かかなたの方へ行ってしまった。
…おいおい。

夏合宿最初の一日はずうっと暇（と言うか休日）なので、みんな夕方まで波打ち際で遊んでいた。
太陽が西に傾いて光がオレンジ色にかわったころ、私は皆が見える防波堤の上に座っていた。
すると急に日が翳ったと思ったら、後ろに皆堂が立っていた。

「よぉ、今まで何してたんだ？皆ビーチバレーに誘おうって探してたぞ」

「あれ、そうなの？ありゃー。私ずっとここに居たんだけどな」

「へぇ…ここからあっちがよく見えんじゃん」

「うん、まぁだからここに居たんだけどね」

……沈黙でさえ、柔らかい海の風にさらわれてゆく。

「いいなぁ…私もあんな風に無邪気に遊べたらいいのに」

「だったら何も考えずに遊べばいいじゃないか。……何でそれが出来ないんだ？」

「……別に。皆堂には関係ないことだよ」

独特の物悲しさを抱えて、立ち上がった。
幅２ｍほどの防波堤は先に行くにつれ、どんどん細くなるように見える。

「そっちは危な……」

ビュウッ

「きゃあっ」

よりによって風が吹いてきて、あさの体が海の方へ傾いた。

「うわっ……」

助けようとして、あさの手を握った皆堂も一緒に海に落ちた。
ドッパーン！

「ぷはぁっ。ごめん、巻き添えにしちゃったね」

「けほっ、別に。それより泳げるか？」

「大……丈夫、だけどゲホゲホッ…喉が痛い」

…大丈夫じゃなさそうだな、と判断した英輔はあさを背負って泳ぎだした。
あさもおずおずと彼の首に手を回す。
しがみ付かれた首と背中からじんわりと温かさが伝わってくる。
手に入れたい女が自分の手の中にいる……

「ごめん」

「え…？」

くるっとあさの腕の中で向きを変えた皆堂が、あさの口唇に自分のそれを押し付けた。
まだ足のつかない深さの海の上で２人は揺ら揺らと漂っていた。
皆堂があさの口唇を食むたび、海水もどっと流れ込む。

「……あっ…はぁ」

「…くっ……大丈夫か」

「何とかね、そっちが溺れさせようとしてたんじゃない」

「どっちに」

「皆堂英輔に。でしょ」

「正解」

頭を掻きよせるようにして口唇をむさぼる。
ふいに向きを変えて、砂浜の方に向かって泳いでいく。

砂浜に着くと、皆が遊んでいる所からは５０ｍほど離れていた。
そこで皆堂は自分が主導権を握れるようにと、やや上に乗る格好になった。
砂浜に左肘をついて右手であさの顔にかかっている前髪をかき上げる。

「そろそろバーベキューの時間じゃないかな」

「少しは遅れたっていいだろ」

さり気なくこの先には進みたくない、と意思表示をしたのだが、さらっとかわされてしまった。

チュッ

と、音を立てて皆堂の顔が近くになり、口唇に体温を感じる。

「……皆堂って、結構モテてるけど意外と欲求不満？」

「…だな。あさの言うとおりだ、自分が一番欲しい女は手に入らない」

パッと皆堂の手を振り払う。

「こんな強引だったらそれもしょうがないんじゃない？」

「……そうかもな、でも分かって欲しいんだ。心にぽっかり空いた亀裂を」

「私…だってずっと求めてた。でも誰も手を差し伸べてくれなかった。だから…諦めたの、希望なんてお気楽な言葉を」

「俺も拒絶されるほうなのか」

「まぁ、そんなものよね。でも皆堂の心の穴は分かるつもりだし、友達ぐらいなら許容範囲だから。じゃあ私ＢＢＱの方に行くから」

甘い予感は２人の胸に、確実に足跡を残した。

余韻は長々と尾を引いて残り、夏の夕暮れに飛行機雲となって消えた。

19話　夏合宿！　2日目

チュン、チュンチュン
朝から元気なすずめ達はさておき、こちらは寝起きも寝癖も口も最悪なテニス部1年女子。

「うぁ～、もう6時ぃ！？つーか起床時間早い！」

「文句言ったって変わるわけでもないけど、いくらなんでも早すぎだろ」

「いつもは7時に起きてるのに……」

「合宿ってさぁ三泊四日だったけど、絶対2年の女の先輩達って違う目的で来てるよね」

「だよねだよね～、傍から見てもわっかりやすいもん」

「……どんな目的？」

「…またまたぁ！あさってばトボケちゃってぇ、皆堂君のことだってば」

「は？皆堂と…先輩達がどういう関係があるの？」

あさのボケっぷりに、一同アゼン……。

「あさって…国の天然記念物だったんだね…知らなかったよ」

「あさの事、鋭いと思ってたけど……そっち系は鈍いんだね」

「え、天然記念物？そっち系？何のこと？」

『『はぁ～～（汗）』』

部屋にいたあさ以外の女子が一斉にため息をついた。

「ま、まさかここまでとは……」

頭を振り振り、部屋を出て行く人もあり…

「見損なったよ」

と、会社の上司の様な口調になる人もあり…

その中で根気よく教えようとしている人もいた。

「あのね、ホラ皆堂君ってイケメンじゃない。あーゆー男子ってモテるから皆(じょし)が好きになるのは目に見えてるじゃん、それで狙ってるわけなんだよね～」

「あー…なるほど……」

ようやく理解したようなあさはほっといて、朝食を食べに行く人が多かった…。

峯「朝ご飯はしっかり食べたかー、あーそりゃよかった、じゃあ合宿始めるぞー。んでもってその前に、居るんだか居ないんだかハッキリしない我が部の顧問を紹介しよう」

1年「???」

「何だよ峯。その紹介の前フリはねーだろ」

そして、さっきから審判のイスに座ったボサボサの髪のおっさん（疲れた顔のおにいさん!?）がいるなぁと思っていたら、なんと顧問だった……。

「よぉ1年坊主ども。俺が顧問の宮下憲弘（みやしたのりひろ）だ、そーんなにきっつい訳でもないから気楽に話しかけてくれていいからなー」

…どうやら、宮下先生も峯と同じで残念なおつむに生まれたようで……。

ボサボサ頭じゃなかったら、女性教職員にモテるんじゃなーいという顔（ルックス）。

いやボサボサ頭も個性か!?

峯「じゃあ、どうせ介入もしないであろう顧問はさっさと帰った帰った」

「ちぇっ、もうちょっと見てってもいいじゃねぇか。あ、それともなんだ、1年の中に気になるコでもいんのか?よっ、若いねコノヤロー」

峯「……宮下センコー。アレを1年にバラすぞ!!」

「わぁ!!わーったわーった、オジンは退散するとしますか。俺はそこのビーチで遊んでるから、緊急事態には呼べよ〜」

生徒に弱みを握られている先生って……レアだぞ！宮下！
つーか緊急事態って……。
峯「ったく…あんなヤローはほっといて、さっさと練習だ練習！」
「…ハイ！」
峯「返事がおそーい！！」
「ハイ！！」
や、八つ当たり！？

ゼェゼェ……八つ当たりだろ峯ぇぇぇ！！
宮下が向こうに行ったとたん、猛練習が始まった。
一々書き連ねると面倒なのでさらっと書くが、本当はこれの…5倍はあるな。
うん。

グリップの握り方から始まって、サイドステップのやり方、実習、テスト。
ホアハンド、バックハンドのやり方、テスト。
サーブの種類、やり方、実習、テスト。
スマッシュ、ノーバウンドなどその他のやり方、実習、テスト。
テストの都度、ダメだった奴は砂浜ダッシュ。
砂浜ダッシュって…こんなにきつかったんだ。
「峯……やり過ぎは危険だって」

おう宮下だ。

峯「へぇ～、昔鬼コーチだったアンタが何を言う」

北嶋「ちょっと峯！」

「…あっそ」

え？何か険悪ーな雰囲気…。

峯って宮下のことキライなのかな？

何だか苦いものを残したまま、２日目は幕を閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8900d/

甘いすうぃ〜つの食べ方☆

2010年11月21日02時59分発行